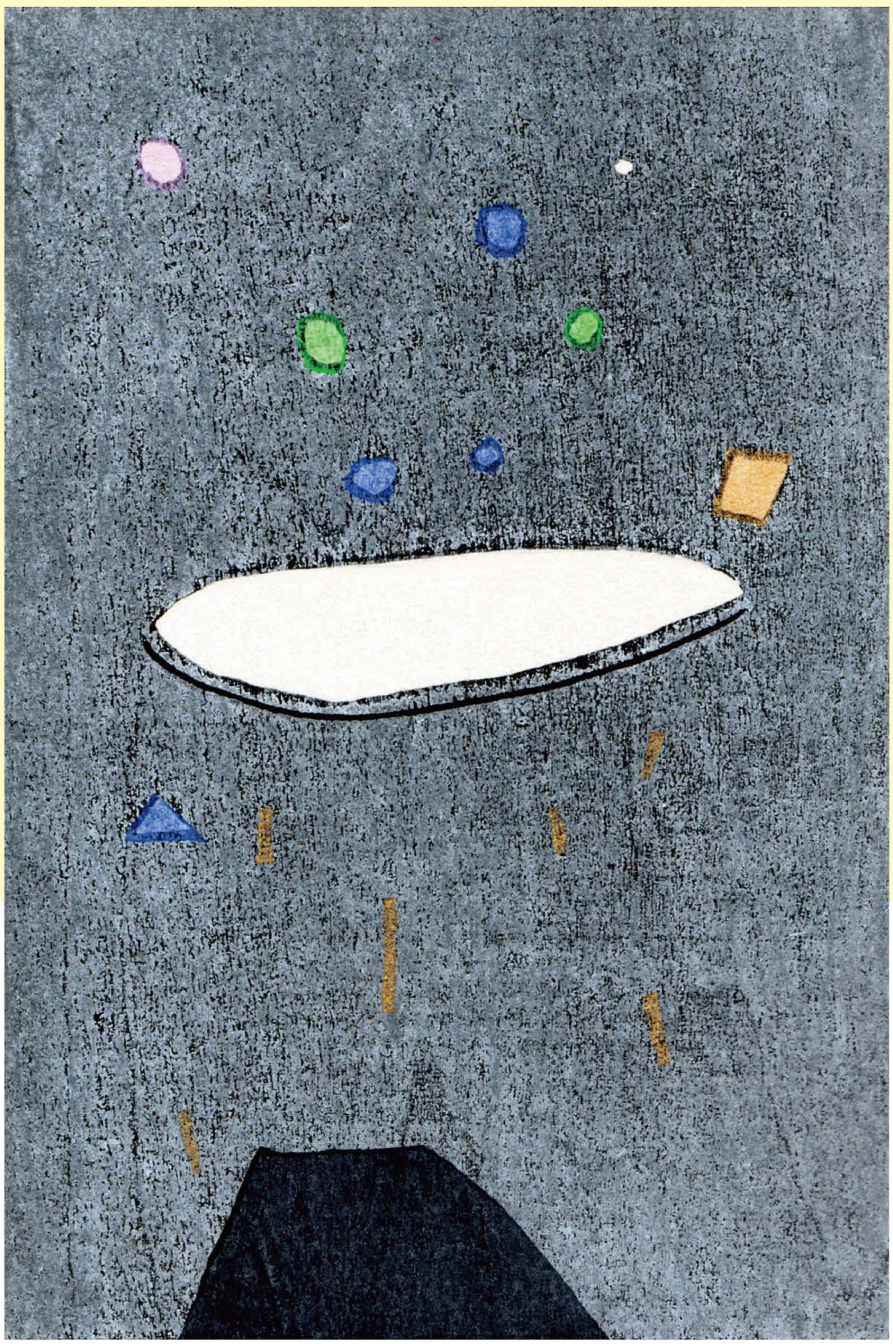
SHUNYOCYO

春陽帖



№106

催事・展示のお知らせ　第102回 春陽展

■チャリティー展示――――2F 休憩室

会員有志による作品の展示、チャリティー販売を行います。
収益は社会福祉法人 NHK 厚生文化事業団、日本赤十字社を通じて、社会福祉事業、自然災害復興支援のために寄附します。

■春陽会研究会の紹介――――2F 休憩室

春陽会では全国に研究会を設置し、絵画と版画の啓蒙及び研究活動を行っています。このコーナーではそれぞれの地方研究会をご紹介します。

■特別展示――――3F 展示室

「三井永一とリトグラフ」



三井永一（1920～2013）は 18 歳で春陽展初入選の後、1953 年絵画部、1964 年版画部会員に推挙され、洋画家、版画家、挿絵画家、ガラス絵作家として活躍しました。
本展ではその多彩な画業の中からリトグラフを中心に作品、資料などを展示します。

19 SAT

入選者会場批評会（絵画部・版画部）

4 月 19 日（土）13:00～15:00　参加無料　当日会場にて受け付けます。

Reception

授賞式・パーティー

4 月 19 日（土）15:00～17:30　国立新美術館 3F 講堂　参加無料

20 SUN

Lecture



講演会　「描くことと書くことと、について」

講師：山口謠司 氏（平成国際大学新学部設置準備室顧問）

何をどう描くか、どう書くか、それは自由です。しかし我々は本当に「自由」に描く（書く）力を得ることはなかなかできません。明治の文豪夏目漱石は、印象派の絵からの影響と、漢詩の世界の影響、そして大患に遭ったことで、漱石なりの「自由」を獲得しました。はたして自由な表現とは何か、自由な境地とは何か。明治以降の文学と絵画の関わりからお話しいただきます。

4 月 20 日（日）　開場 13:30　開演 14:00～15:30　　国立新美術館 3F 講堂　入場無料

26 SAT

春陽展アートツアー

4 月 26 日（土）13:00～14:00 2F 会場入口集合
参加無料、ポストカードプレゼント

Art Tour

一般の方を対象にした、絵画・版画鑑賞ツアーです。
春陽会会員の解説を受けながらアートの新たな楽しみ方を発見していただきます。

information

春陽会 100 年史「春陽会史料館」（WEB アーカイブ）

http://shunyo-archive.com/

日本美術史の研究に資する目的のため、春陽会が所蔵する創立から現代までのあらゆる記録や資料をデータベースとして公開します。
出品目録、印刷・出版物、新聞・雑誌等の掲載記事、音声、写真、動画など、未来に残すべき貴重な資料をデジタル化し、いつでもどこでも検索できるシステムとして構築しました。日本の美術団体としては初めての画期的な試みです。

春陽会公式 HP　　春陽会史料館

春陽会事務所（月・水・金 10:00~17:00）
〒102-0085 千代田区六番町 1　番町一番館
TEL＆FAX　03-6380-9145
shunyo-kai@shunyo-kai.or.jp

CONTENTS

prologue

2　理事長挨拶

第 101 回春陽展レポート

4　審査・陳列・展示レポート

6　講演：座談会 - 春陽会の新たなスタートにあたり-

9　特別展示「岡本省吾と春陽会」

10　受賞の言葉

春陽会 2024

18　新会員紹介

20　巡回展　名古屋展・関西展 レポート

23　展覧会 PICK UP！

24　SNAW2024 レポート

message

26　全国研究会から

epilogue

32　新旧事務所より



「春の日の昇るころ」



春陽会 理事長　立堀秀明

大きな節目となった第 100 回記念展を経験し、余韻に浸る間もなく次の展覧会は粛々と進められていく。一度立ち止まりあたりを見渡し方向を定めてから次の一歩を踏み出す事が必要かもしれないと感じた。

公募展の良いところは、継続して発表していくことで個の点が連なり、線となりその変化や成長が見えて来る事だろう。色とりどりの線が集まり、色面となり会の色として見えて来る。会の歴史も加わり時代の層が出来て世代間のバトンタッチが行われる。同じく公募展は人の集まりの面白さでもある。個性の強い集まりの時ほど会は活性していた様だ。現在の日本の人口の年齢構成を調べると危機を感じ、バトンを渡す世代の輪郭が見えて来ない。人と人との付き合いを得意としない世代には公募展は不向きなのかもしれないが、世代間の交流はそこに新たな価値観が生まれ新たな発見があるのだと思う。

子供の頃は世の中は明るい方向に進んで行くものだと思っていた。物事は発達して便利になり平和になるものだと思っていた。レコードはモノラルからステレオへ、オープンリールからカセットテープ・MD・CD・データ配信に移行し、映像はビデオテープからレーザーデイスクや DVD となり、同じく今はデータ配信が主流になっている。本もタブレットで読むようになりメディア・媒体を変化させている。電話はダイヤルからプッシュボタンへ、そして手に乗るほどの持ち歩くコンピューターの中の一部となってしまった。幸か不幸かその変わり様を経験し見ることが出来た。何故かレコード盤やカセットテープは、新しい文化となり復活している。

変わらないものは何もなく変化に適応出来たものだけが生き残れるのが自然の摂理だろう。「絵画はどうだろう。版画はどうだろう。」と改めて春陽展会場を眺めて見る。

絵はどのように時代の変化に順応し、迎合し、抵抗し、変化してその精神を貫いて来たのだろう。

世の中の情勢はこれまで以上のスピードであふれるほどの情報が手元に届いて来る。取捨選択をするもそれに影響を受けてしまう。本質を見失わなければ、その変化に順応したり抵抗したりして、混乱や停滞が起きたとしても、それを楽しむくらいでありたい。

《転がる石には苔は生えない》と云う。

第 102 回春陽展に向けて

「春陽という船」



展覧会実行委員長　大津悟司

第 101 回展が盛況のうちに開催され、皆さんの胸に、まだ第 100 回記念春陽展の熱気が残っているのを感じました。

さて、春陽帖第 100 号を読み返すと、始まりに入江観氏の簡潔で重みのある言葉があります。その後半に「その（春陽の）実績を確認し、顕彰する機会とするものであるが、何より大切なことは、現在の私たち立ち位置を冷静に確かめ、100 年続いた歴史を慣習的に継続して良いのかどうか、団体展の意味が問われている今、何故に続けるのかを会員のひとり、ひとりが問いかけ、自覚することではないかと思われる」とあります。

この問いの答えの一つが、第 101 回展だったと思います。イベント的なものを極力排し、原点を振り返りつつ作品で勝負をするという気概が感じられました。今回の第 102 回展は、問いに対する二度目の回答でありたいと思います。

個人的なことですが、私は会員になって日が浅く、春陽の原点を十分に理解している自信がありません。これからの若者も同じではないでしょうか。

でもいつかは、いや、すぐに若い人に任せねばならない時が来ます。春陽は歴史ある大きな船ですが、今後それを動かすのは若い船乗りだと思います。

吉田拓郎の『イメージの詩（うた）』を思い出します。

「古い船も新しい海に出る。今それを動かすのは若い水夫だろう」と。

続けてこうも言っています。

「古い水夫は新しい海の怖さを知っている」と。

春陽という船がどんな方向を向いているのか、5 年後 10 年後を見据えて進んでいきたいと思います。











絵画部　審査・陳列・展示レポート

新たな百年の幕開けとなった第 101 回展の絵画部は総展示数 508 名 578 点、うち公募の入選者は 346 名 371 点であった。本展は原点回帰を合言葉に、作品で魅せる展示を目指した。

会員作品の並ぶ AB 展示室では、第 1 室に B 展示室まで連なる大空間をつくり、200 号以上の大作を中心に並べて現在の春陽会の一面でもある力強さを印象付けるようにした。また、展示壁面は回廊形式の動線にし、全作品を一巡でしっかり鑑賞できるようにした。

公募作品が並ぶ CD 展示室は従来通りの部屋形式の壁面ではあったが、2 点入選者を除いてすべて一段掛けの並列とした。その結果、それぞれの作品をじっくり鑑賞でき、作品で魅せるという方針に沿う展示になったと自負する。しかし観点を変えると、展示作品が減少したから可能になったという負の要因も顕在化した。

作家を目指す絶対数が減少していることもあるが、若い世代を中心にしたサブカルチャーの流行も理由の一つかもしれない。彼らにとって、研鑽を積んで絵画と向き合う公募展は関心の外にあるのだろう。この「サブカル」を日本の現代美術として専ら祭り上げる美術市場は、現実としては受け入れなければならないだろうが､流行を追うだけが絵ではない。所詮は「ハイカル」に対する「サブカル」なのだ。

だからこそ、絵画本来の魅力と、それを大切にしている春陽会の姿勢を社会に発信していくべきだろう。そのためにも出品者一同が、今以上に鑑賞に値する良質な作品を追求すべきと、次の第一歩を踏み出した本展に惟う。

第 101 回春陽展 絵画部審査主任　三浦明範







版画部　審査・陳列・展示レポート

版画部審査は 4 月 6 日 10 時半より出席者の過半数確認後審査を開始しました。一般・会友と審査を進めていく中で、今年は昨年度より水準が高い作品が出品されてきたと安堵しました。第 100 回記念展の盛り沢山の行事・展覧会を経て、今年は本展に向けて、時間的余裕があっての制作と推察しました。

審査は時間内に審査員総意のもと、闊達な意見交換を経て公平に行われました。その結果技術的な要素重視ではなく、表現やテーマ性において高評価の作品を選出しました。今年は賞候補を多めに出すことを提案、審査員総意のもと 50 名の賞候補者を選出しました。審査基準 2 点入選の作品を入念に見ることで、より出品者の作品制作意図、内容、資質を知ることが出来ると思ったからです。

今年の出品作では、今の現代社会の課題を反映している社会的、環境的なテーマを扱った作品が目を引きました。伝統的なエッチング、リトグラフ、木版に新たな素材とアプローチを加えた現代的且つ独自の表現は、改めて版画のメディアが持つ可能性を感じました。春陽展の版画部門では技術的な完成度だけでなく作品が持つ独自の表現やテーマに対する深い洞察、絵画としての版画を重視しています。

審査結果：＊初出品　7 名　＊入選人数　113 名　＊出品数　272 点

陳列（全室一段掛け）：版画部会場入口　第 44 室：受賞者　第 45 ～ 46 室：賞候補者

第 53 室：特別展示他、全体的にメリハリのある展示になりました。銅版画家岡本省吾の特別展示は好評を博し、日本の版画界を最初に牽引した春陽会の輝かしい歴史を垣間見るものでした。

公募団体の危機感の中、第 101 回展を迎えた春陽会。記憶に新しい先達の第 100 回記念企画「それぞれの闘い」展に、その洗練された作品を見た時、春陽会に関わる作家たちは毎春の展覧会出品の意義を感じたと思います。少子高齢化、公募団体危機感の中、同じ目的意識を持ち、春陽会への熱い思いがある人々がいる限り、春陽会は画壇としての役割を担い、存続していくと思っています。

第 101 回春陽展 版画部審査主任　大久保澄子

第 101 回春陽展 講演会

座談会　春陽会の新たなスタートにあたり
－ギャラリストが語る公募団体・その可能性と未来－

2024 年 4 月 21 日（日）　国立新美術館　3 F 講堂　開演 14:00　閉会 15:30

ゲスト：椿原弘也 氏（ギャラリー椿会長）
　　土倉有三 氏（ギャルリー東京ユマニテ代表）
聞き手：入江　観 氏
　　清水美三子 氏





椿原弘也 氏

1946年 東京都生まれ。
1969年 慶応義塾大学卒業後、
大阪「梅田画廊」本店に入社。
椿近代画廊を経て、
1983年 ギャラリー椿を設立。
これまで新美術商協同組合理事長
アジア・パシフィック画廊協会日本代表
などを務める。
2023年 ギャラリー椿オーナーを引退。

purpose

春陽会百年の歴史を踏まえ新たな一歩を踏みだした第101回春陽展の講演会として、長年画商としてご活躍されてこられたギャラリストのお二人をゲストにお招きし、現在の美術界の動向の中で公募団体が抱える問題点とその可能性について率直なご意見を伺い、また、数多くの作家を発掘・育成されて来られたこれまでの経験上の観点からの話を伺う座談会を開催しました。

prologue

公募団体展というものが衰退の危機にあると云われ、春陽会が現在置かれている状況と今後のあり方について、経験豊かなギャラリストの意見を伺い、何らかの糸口が探り出せたらと期待しての企画でした。

当初登壇予定だった小林裕児氏が新型ウイルス陽性反応のため大事をとって欠席となり、急遽、会員の入江観氏に出席を依頼し、同じく会員の清水美三子氏と共に聞き手となり、お二人から興味深い話を聞くことが出来ました。

episode

「小林裕児です」と入江氏自己紹介の笑いから始まり、お二人のギャラリストに春陽会の印象をお聞きし、幾つか用意した質問事項にそれぞれに応えていただきながら進められて行きました。

先ず、お二人に春陽会の印象をお聞きしました。

椿原氏：国立新美術館での公募団体展という事で、アカデミックで保守的な団体かと思っていたが、春陽展は個性的で意欲的な作品を発表されていると感じました。以前ですと団体展の色というものがあり、それに合わせて出品して賞を取って行くという認識をもっていましたが、認識を改めました。

土倉氏：これまで公募展・団体展に出品している作家とあまりお付き合いはありませんでしたが、自分は版画作品が好きなので、加藤清美氏と係わった事もあり、版画部の作品の中にそうしたものを踏襲されている方がいると云う印象です。

以下、両氏からの意見抜粋

公募展の在り方として、広い会場に大作が２段３段と飾られていても１点ずつ丁寧に観て行くのはやはり難しいですし、全ての作品を観る事は困難で、見落としてしまうこともあります。埋没してしまう危険もあるかもしれません。小品の素晴らしさもあると思うので再考しても良いのではないかと思います。



土倉有三 氏

1947年 京都市生まれ。
1965年「大阪フォルム画廊」大阪本社に入社。翌年、東京店勤務。
1974年 副店長に就任。
1984年「ギャルリー東京ユマニテ」の店長を経て、
2000年 より代表を務める。



絵画部会員
入江　観 氏





版画部会員
清水美三子 氏

ギャラリーや画廊では展示不可能な大作を出品できるのは公募展の利点でもあるし、隣りに別の作家が並び比較するという面白味もある。しかし一人の作家の作品は多く見られないので、個展も大事だと思います。意欲をもって公募展にも出品し、個展も開き多くのめぐり合う機会を増やす事が大事だと思う。

画廊や画商は作家を見出す時、売れる売れないででは観ていない。少なくとも今日出席した我々は、まずは作家に惚れ、作品に惚れる。長い付き合いの出来る資質を見出している。作家の成長と共に我々も成長していく。画廊の命は信頼と信用で成り立って

いると思う。画廊の信頼があり、作家に発表の場を提供し、それに応えて作家が成長して行く過程を観ている。もちろん画廊維持の為に、経済的活動もし、セカンダリーな経済活動もしています。それもやはり画廊の信用、信頼の上に成り立っています。

団体展の窮屈さもあるかもしれません。画廊としては作家が自由であってもらいたいと思いますし、そこにはやはり信頼と信用関係のうえに成り立っています。今の作家には公募団体のほかに国際的なアートフェアもありますし、SNS等で個人的に発信する方法もありますが、売れる売れないに関わらず展覧会をして作品を見てもらう。会場での臨場感を味わってもらう。積極的に個展を開き出逢いの場を設け、そこには画商との出逢いもあります。

＊

最後に会場から三浦明範氏、渡辺達正氏の手が挙がり、質問と意見が出された。

三浦氏：今の日本の美術界の現状として、作家・画廊・評論家の三者が一体で成り立つべきであると思うが、一般的な部分として希薄であり、文化行政というのは美術界に非常に厳しい。貸画廊という文化もあるが個人では経済的に負担が大きい。そこで公募団体がこれまでその役割を担ってきたと思うが、SNS等での個人的発信の仕方も出てきているが、今後の公募団体の未来についてのご意見があれば伺いたい。

公募展の始まりとして、発表の場を確保することから始まり、主義・主張の同好の士が集まって団体が出来たのだと思う。

しかし発表の場としては限られ、個人の展示点数も限られてしまう。毎年の公募展だけの発表だけでは前には進まないし、公募展以外に展覧会を開き、歯を食いしばって積極的に出逢いの場所を作らないと生業とはならないのでは無いかと思う。

団体にヒエラルキーが存在するとすれば、それは絵描きにとっては功罪だと思います。

渡辺氏：お二人は非常に忍耐強く顧客の話を聞き作家の話を聞く信頼の厚い画商である。私はお二人から忍耐強さを学んだ。

「絵描きも我慢しているが、画商も我慢している」という入江氏の言葉で、座談会の幕は降りました。

立堀秀明（展覧会実行委員長）／文責





3 階版画部会場の壁面展示

第 101 回 春陽展　特別展示「岡本省吾と春陽会」

岡本省吾の銅版画は写実に徹しており「永遠の武蔵野」その佇まいを生き生きと銅板に写し自然界の親愛感の直接的表現の作品と共に庶民の画家として親しまれました。

1964年頃試作した銅版画のテーマは70年代に入り武蔵野シリーズに結晶していきます。その作品は失われていく武蔵野の自然、四季と精神が溶けあって創造され、精緻な自然描写は、たおやかに作品の中に息づいています。

春陽会への出品は絵画部会員越智雄二の勧めがきっかけで、50才の時に会員に推挙されました。駒井哲郎、清宮直文、由木礼、浅草の芸人さん達との深い交流があり、映画活動写真にも傾倒し、挿絵、パンフレット、ポスター制作等その活動は多岐に渡りました。

今展ではマニエル・ノワール、エッチングによる代表作「彩雲」「春の池」「残り葉」他を展示しました。銅板の鋭い線、細い柔らかな線の繋がりによる拡がり、滑らかな樹肌の質感を創り出す画面から岡本省吾のメッセージを受け取っていただきたく特別展示の運びとなりました。

企画展示担当　大久保澄子／文





陳列ケースの展示

岡・中川・SOMPO 賞

岡鹿之助賞

版画部会員

彦坂　陞／HIKOSAKA noboru　『青の世界-11』95×74 平版





この度、岡鹿之助賞をいただき、うれしくまた大変光栄に思います

60 歳で何もわからないまま、見ることが好きだったリトグラフの制作を始めました。テーマは、企業にいた時の仕事の影響もあり「人と地球の共生」で今も変わりません。

青い空と海、そして土に生きる物すべてのコスモスを表現し続けたいと思っています。

これまで育てていただいた春陽会のみなさまに心よりお礼申し上げます。

岡鹿之助賞 推薦理由　　推薦委員　大久保澄子

第101回春陽展岡賞は彦坂陞氏が受賞されました。誠におめでとうございます。

彦坂氏の佇まいはいつもスマートで、今日に至るまで一貫した制作姿勢と安定した作品を制作されてきました。出品作「青の世界-11」のコンセプトは人と自然の共生、地球保全を謳ったもの。自然破壊への警鐘、自然への謳歌、青を基調とした画面から聞こえてくるのは、大気は青い！海は青い！美しい青の諧調からは地球の地底から宇宙の彼方まで、部分と全体の有機的な関係からのイメージが膨らみます。

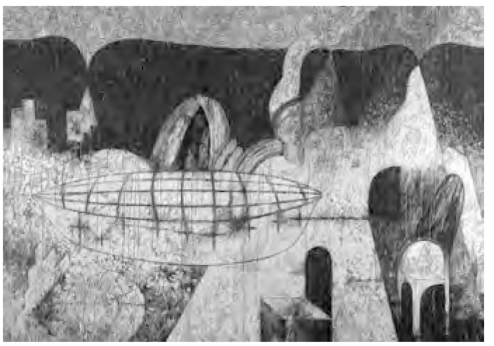
変幻自在な美しい青のフォルムの重なりの狭間に点在する人、鳥、家などの象徴的な形は記号となって彦坂氏ならではの自由で、瑞々しい効果的な抽象作品を創り出しています。

リトグラフの制作工程における超ハードでスピーディーなローラー技術を要する版作り。それらを駆使して、見せるサイズ感でコンスタントに制作出品されてきたことにも敬意を表します。青の世界の抽象表現の更なる展開を期待しております。

中川一政賞

絵画部会員

小池　悟／KOIKE satoru　『楽園』227×324 アクリル





自分は絵描きになると信じて疑わなかった。が、振り返って、結局自分は美術教師であった。

また、絵描きになって何をしようとしていたのか、とも思う。絵で生業を立てたいとの気持ちは常にあったが、実現することなく気付くと憧れた夭折の画家たちの倍以上の歳になっていた。

ゴッホの作家活動期間は約 10 年。これからの 10 年は、絵を描くことだけに夢中になろう。

10 年ならば、集中し持続もできることだろう。

中川一政賞 推薦理由　　推薦委員　沓間 宏

小池悟氏は、アクリル絵の具を用いた抑揚の効いた色調に、飛行船や箱舟、擬人化したキャラクターたちを時に装飾的に登場させて、さながら異国の古書を紐解いて眺めるようなイメージを、巧みに組み立て制作して来られました。

この度の作品「楽園」は、長年培った技法を駆使して作り上げた重厚なメチエに、大宇宙（マクロコスモス）と小宇宙（ミクロコスモス）とを見事に融合して、さらに壮大な物語を紡ぎ出し、深淵で類を見ない創造的世界を提示して見せてくれました。

豊かなイメージとこれを支える強固な造形とによって、絵画表現における語りの構造を、独自の視点で進化させた作品の充実には目を見張るものがあり、推薦委員の全員一致を持って中川一政賞が授与されました。

SOMPO美術館賞

絵画部会員

ブレンドレ ヨーグ／BURENDORE joerg『GUAYABA'24-1』F130 油彩





SOMPO 美術館賞受賞についての電話があった時、まずビックリ。次にとても嬉しく感じました。

一年間日本から離れてコロンビアの首都ボゴタで過ごしたので、第100回展に参加できず大作品も描けなかったのです。しかし、自然豊かなコロンビアで果物の種類が非常に多くて、すぐモチーフから水彩や小さな油絵を描いて今回の大作品の準備ができました。

SOMPO美術館賞 推薦理由　　推薦委員　入江 観

ブレンドレ ヨーグさん個人については、殆んど知ってはいない。

20年以上前にドイツから来日して神戸大学で数学を教えているということを人伝てに聞いただけである。春陽会への出品歴も、かなり長いらしいが、私がその作品に注目するようになったのは、この2,3年前後のことである。

私は、60年前のフランス留学中にドイツの国境近くの町コルマールで、グリューネヴァルトの祭壇画を見て、そのリアリズムの苛烈さに圧倒された記憶がある。

ヨーグさんの仕事にも、同じドイツの血が流れているかも知れないが、画面構成は現代的ではあるが、曖昧な叙情性を排した物に対する厳しい視線がある。こうした視線は、従来の春陽会には見当たらないもので、新たな刺激として受けとめたいと思う。

その意味で一層の進化を期待するものである。

春陽会賞



「岩壁のマチエール IV」　F130　アクリル



植村　友哉（絵画会友）　　10 年

10 年前に企業を離れ、多くの方々の支えの中で挑戦と失敗を繰り返しながら、作家としてここまで歩んで来られたことに感謝しています。

故郷の岩壁に刻まれ続けるヒビや崩れを見つめ、過去の感情、経験、そしてこれから体験するあらゆる課題を作品に昇華し続けたいと思います。



「移ろう時 2024-1」　F100　油彩



太田　利徳（絵画一般）

春陽会賞を再び頂くことが出来ました。これは偏に折々にご指導を頂いた先生方のお陰であると感謝しております。有難うございました。

さて、昨年 2 月に研究会の先輩方や身内を相次いで亡くしました。「人の儚さ」テーマにキャンバスに向かう私にとって、儚さを痛感する出来事であり、又同時に微かな時の移ろいを感じる出来事でもありました。



「擁 24-2」　71×51 平版



小坂 啓偉子（版画会友）

捨てられずに大事にしまってある紙袋やかご、びんなどの“器”がわたしの作品のモチーフです。無表情なただの器が、何かを入れることで目を覚まし、生き生きとした表情に変わっていく･･･そんな様子をながめるのが好きです。

今は“器”たちと中に入れるものたちとで創り出される風景を大事にして、制作を続けていこうと思っています。

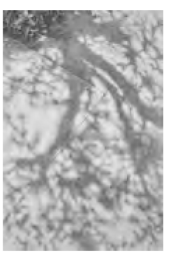
奨励賞


「週末の地図Ⅱ」S100 油彩

浅川 正章（絵画会友）　　雑 感

「自分の風景」に出会うためにキャンバスへの格闘が続く。塗られた絵具をこれでもかと剥ぎ取る。画布は引っ掻かれ痛々しい。その下からは全く違う風景が幾重にも描かれては消され、また現れる。剥離剤の量と絵具の残骸が自慢？

ここに来て自分の風景が少し見えてきたような気がする。思い通りにならないことが順調であると信じて、ただ描き進むだけだ。


「響Ⅰ」F120 油彩

稲垣 朋子（絵画会友）　　夏を想う

猛暑が続く 8 月半ば、東京で初めての個展をさせていただいた。案の定搬入当日の朝まで準備に追われ、なんとか作品を車に積み込み、５時間半の運転で銀座に到着。あらためて相当なエネルギーが必要だと実感した。

画廊では絵の話を中心に会話が飛び交い、その中にいるのがとても心地よい。ここで何を見つけて次に行くのか。いただいた言葉が響いている。


「空間Ⅱ」F130 油彩

鵜飼 冴子（絵画会友）

今回は手順が異なり、いつもの 2 度ほどの壊しをせず続行しました。他の出品作はゆとりに欠けました。

受賞作品は全体的に不安定な画面でした。終盤の光の描き入れで変化が生まれ、何時になく楽しんで描いていました。


「division」F100 油彩

大塚　弘（絵画会友）　　逍遙礼賛

健康を気遣って、散歩を始めた。

ある日、落ち椿を見つけた。枯れたツタ草の上に散らばっていた。

花弁が黄土色に爛れたもの、その先端に青色を浮き立たせたもの･･･土に還る途中で見せる椿の百態に夢中になった。何となし器量一杯に描き留めようと思った。

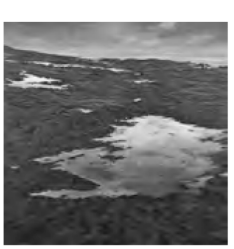
この度の受賞は散歩の賜。今後も腕と同様、足腰の鍛錬に心掛けたい。


「Rainy II」F100 アクリル

加藤 順子（絵画会友）　　変 遷

横断歩道を描いて 10 年になる。都会のスクランブル交差点を行き交う群衆の人模様を描きたかった。ところがある日、身近な横断歩道に感動を覚えた瞬間があった。モチーフは同じでも絵はその姿を変える。これは進化なのか退化なのか、絶えず迷いながら筆を持つ。

そして近頃新たな不安が生まれた。横断歩道を私はいつまで描くのか？悶々とする日々。


「水のゆくえ IV」S100 アクリル

川端 陽子（絵画会友）

私は、描く時、心に浮かぶ小さな物語をイメージします。しかし描くにつれて、思わぬ方に展開し、「これでいいのか」と悩むことも多いです。

振り返って見ると物語の中心にいつも「命の不思議」があります。「大地と水」から生命が生まれ、いつかそこに必ず帰っていく不思議さ。

これからも、揺らぎつつ真摯に、私なりの物語を紡いでいきたいです。

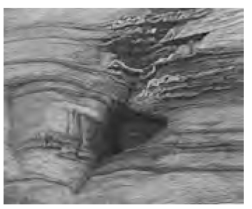
奨励賞


「REMINDER」F130 アクリル

クニイ マリコ（絵画会友）　　強い心で

制作中は迷いや考えすぎで、違う見方や角度をあれこれ探して描く事がありますが、最初に自分がいいと思った真直ぐな見方を評価頂くと、素直な見方の良さに気付かされます。そして、自分を信じ切れなかった事にも気付かされました。

制作で考えすぎる時こそ自分を信じ、強い心で制作が出来るように、今後も鍛錬し努力していきたいです。


「亀裂」F130 油彩

古閑 良隆（絵画会友）　　何かを求めて

海岸の岩場を散策中、御輿来海岸を見つけた。潮が引くと遠い昔、この地域で火山が頻発し、溶岩が谷間を下り海辺で固まった岩が現れた。褶曲した地形や、扇状形の平板盤が非常に面白い景観を成している。

荒々しく変化に富んだ地形を、何とか絵にしたいと取組んでいるが作品に成らない。これからも試行錯誤し、描いて行きたいと思います。


「いきもの日記 2024 II」F100
ミクストメディア

佐々木 芳子（絵画会友）　　おそれず

「大地を裸足で歩くように絵を描く 波をかぶっても平気な海洋人のように おそれずに絵を描く」という秋野不矩の言葉に、ちょうど春陽展に出品しだした 81 回展の頃、出会いました。その様にありたいと、いつもキャンバスに向かうのですが、自分の絵のあまりの稚拙さに怖気づいてしまいます。深い霧の中を、ギーコ、ギーコと、舟を漕いできたような…。

そんな中、今回、ポッと灯りがともりました。初めての受賞。あたたかい励ましでした。これからもまた、おそれず、自分の裸足の感覚を信じ育てて、描いてゆきたいと思います。


「ふるりる 2」F130 油彩

田口 玲子（絵画会友）　　タイトル考

刈り込まれた生垣の内側から濃密な色が湧いてくるようで惹かれた「Scene」。

ある日、大きな木の下に入り見上げたら繁った枝が重なって丸い形がいっぱい見えた。風が吹くと丸が騒ぎだした「Ronde」。

早春の色探しで見付けた「Fleurir」咲く。「ふるりる」とひらがなにした。

初出品から第 101 回展までの 3 つのタイトル。「ふるりる」は続く。


「生きるⅡ」F120 油彩

長谷川 千津（絵画会友）　　わたしとキリン

コロナに始まり、ウクライナ戦争、そして震災。次々と私達に襲いかかってくる事件。目を閉じると暗闇から人々の叫びが聞こえてくる。いつか幸せな時が来ると願い、キリンと対話しながら一筆一筆心を込めて描く。この時間が私は好きだ。

どんな世界になろうと「生きる」ことが私の願い。

私の中のキリンと未来の幸せを願い描き続けていきたい。


「縁の下の力持ち」F130
アクリル

室町 克代（絵画会友）

冷蔵庫の中で腐った野菜を見ていると、申し訳ないような気持ちになり、この野菜は何だったのか？腐るために育ってきたのか？いやきっとこの野菜もできてきた意味があったのではないか？生ごみにも意味があった？などなど自問しながらキャンバスの中で蘇らせています。

これからも迷い道を歩みながら制作していくと思います。



「石標」M120
アクリル

山村 泰雄（絵画会友）

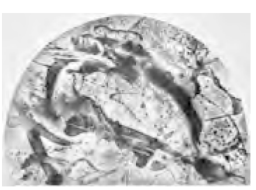
石をモチーフにして 10 年余りになります。
先日、県境の海岸まで行ってモチーフになりそうな石を探してきました。
ところが、良いなと思って拾ってきたはずなのに、眺めたり触ったりしてみても、なかなかお呼びがかからないのです。どうも石のせいではないような気がします。
私の気持ちの方が石から少し離れていく、危ない時なのかもしれません。



「無言の音 2024- 静 -」145×182
水干絵具

藁科 美穂（絵画会友）

今年も沼にハマる。自分の考えとは裏腹に形が作られていく。
限られた空間でどのように表現しようかと小一時間。
さあ、楽しい楽しい時間の始まり。
作品はあまり楽しくなさそうですが、本人は至って楽しんでいるのです。



「Underwater Annealed H9」
60×87 コラグラフ

辻　義弘（版画会友）

ホテル日航関西空港で 2 か月に及ぶ個展の機会を得ました。2015 年に版画を始めてから、「水に関する作品」46 点を選んで展示をしました。
独学でいろいろな版種を学んできました。今は、キャロルサマーズの技法を参考に、仕事をしていますが、それが奨励賞につながり、大きな励みと創作の道標になっています。受賞まで多くの方々のご指導に感謝しています。



「Self Interview '24-2」
125x95 コラグラフ

永幡 民子（版画会友）

私は子供の頃から、昆虫の変態が不思議だった。幼虫→蛹→成虫。あの蛹の中で何が起きているんだろう？
改めて版を手にする。顔として作ったはずの版が、細長い楕円の「さなぎ」に見える。それを破ってちぎって再構成していると、植物もどき・虫もどきが現れる。
制作 = 変態！に気付いてから「何が出てくるか？」楽しみになってきた。



「彼方のヒカリ XVI」50×70 平版

山崎 英子（版画会友）

10 年ぶりに日本で開催されたデ・キリコ展を観に行き、キリコの表現する世界観を知ることが出来た。
『公園のベンチにすわり、病み上がりの状態で回りのものを見ていた時に、あらゆるものを初めて見ているような不思議な感覚に陥った。脳裏に絵画の構図が浮き上がってきた。こうして生まれた作品を「謎」と呼びたい。』とある。



「光の組成 23-2」60×90 銅版
エッチング・アクアチント

山本かつ江（版画会友）　　コツコツと版画づくり

10 年くらい前からでしょうか、学生の頃学んだ平面構成に挑戦しています。銅版画の制作は、本当に奥が深く手法も沢山あり、なかなか思うようにはいきません。平面の中に立体を潜め、その中に光の組み合せを描きたいと、日々考えています。
版画は、作品の紙をめくる瞬間、ドキドキ感が最高です。これからも、コツコツと版画づくりをしていきます。

奨励賞


「残骸」80×60 銅版

宇文 籐玥（版画一般）

この度は銅版画作品で奨励賞を賜り、また講評会で貴重なご意見を頂き、誠にありがとうございました。

細部まで表現を追求し、自分なりの感性を形にすることが評価され、大変励みになりました。今後も挑戦を続け、銅版画の可能性を広げていきたいと思います。


「裸木」81×110 木版

尾崎 明美（版画一般）

心をわしづかみにされたようなものに出会った時、それを版画で表したくなります。しかし、彫りや摺りを試行錯誤していくうちに、言いたかったことから逸脱したり、着地点を見失ったりすることも度々です。

そんな迷走している私が今回受賞できましたのは、関西研究会版画部の皆様のご指導のおかげと感謝しております。

会友賞


「やさしい時間」 F130 油彩

石本 和子（絵画会友）　　スキーと「やさしい時間」と私

この度の初受賞、大変嬉しく思います。

子どもの頃からスキーを楽しんでいました。ところが最近、上級者をめざし、度々行くように。ままならないレッスンの合間、やさしい木々の影の色合いに癒され、シュプールにワクワク。その楽しみを描くように。

足のあちこちのトラブルを治しつつ、もうしばらくスキーと絵を続けたいと思います。


「子どもの情景」 F80 油彩

岩瀬 治美（絵画会友）

南大路一賞を筆頭に奨励賞 2 回、会友賞をいただいたものの、絵は思うように制作が進んでおりません。子どもたちの遊ぶ姿をとらえて絵にしてきました。コロナもあり遊具で遊んでいる姿が見受けられなくなりました。

これからも受賞に恥じない作品を制作したいと思っています。よろしくお願いします。


「埠頭Ⅰ」 F80 油彩

大木 利子（絵画会友）　　ポジティブに

春陽展には第 90 回からの出品です。私の制作は描いては削り壊しながら構成していきます。試行錯誤の繰り返しです。

埠頭のクレーンは 7 年目です。何度もモチーフを変えたいと思い乍らでした。最近やっと心のフォルムが生れ、黒の物体に愛おしささえ感じます。風景の中にどう表現しようかと楽しんでいる自分に気付きました。

今後共ご指導宜しくお願い致します。

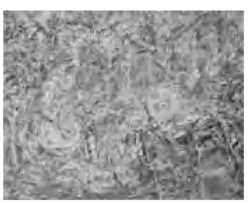


「ひねもすのたりⅠ」
F100 油彩

大澤 正信（絵画会友）　　春陽展と白い花

授賞式の日、国立新美術館に行った時のことです。大きな吹抜けをエスカレーターで上がっていくと、ふとガラス越しに見えた真白な花多分ツツジの花だと思うが、すごく印象的だった。

春陽展の会場に入ると、色々な作風の作品の多さに驚きレベルの高さに圧倒され、もっと気合を入れて掛からねば、と思う。来年もまた、あの真白な花と春陽展を観ることを楽しみに制作を続けたい。描くことへの感謝と楽しさを感じながら。



「龍宮窟 春の陽」 F100 油彩

七里 榮一（絵画会友）　　出合った事

高校卒業後、研究会で。春陽展が第 45 回頃、搬入の為、打ち合わせした日に皆さんの作品を取りに、トラックで鎌倉方面に。絵描き宅に伺うのは初めて。

先輩と同席し足立源一郎宅に着いた時、玄関前に和服の恰好で「よろしく」と一言。関、越智、遠藤、安喰先生方宅を廻って上野都美術館に搬入したことが有りました。

私は第 49 回に初入選、23 歳。それ以来春陽展。今回の受賞はとても嬉しく思います。



「岩長姫と木花咲耶姫」
F100 油彩

吉澤 孝広（絵画会友）

賞を頂けたことは、会の方々に絵を見て頂いたことのありがたい証と考え、感謝して制作の励みにしてゆきたいと思います。

また、この様な華のある評価を頂いたことは、本当に貴重なことなので、これからも制作に努めさせて頂きます。

これからも見て頂けたら、ありがたいです。よろしくお願い致します。



「日本一長寿のナシの樹（日面紅）
老樹のナシが実をつなぐ」44.8×60

福岡 幸一（版画会友）　　春陽会という旅路

さて、北海道北見市の高校で油絵に出会い、1966 年、19 歳から油絵、21 歳から版画を「全道展」に出品。1987 年、40 歳から〈故〉渋谷栄一会員の薦めで春陽展に出品。以来、一年の始まりは春陽展と相成っています。

2016 年「札幌時計台ギャラリー・全室」で生涯展を開催。

これからも「北の風土」と更に向き合い、春の出品に励む所存です。



「Way」 30×70 銅版

麓　絵理子（版画会友）　　がんばります

この度は会友賞を頂き、誠にありがとうございました。地道に続けてまいりましたが、版画に飽きることはいまだありません。今後も継続を目標に精進してまいりたいと思います。

今回の受賞は、私の技術や応用力を育んでくださった大学版画教育に対する評価だと感じております。この場をお借りして大学時代のすべての恩師に御礼申し上げます。



「In the valley he restore my soul」
38×45 凹版・ドライポイント

山田 麻意（版画会友）

特別な美術教育を受けていないことがずっと私のコンプレックスでした。この受賞をきっかけに少し自信が付き、さらなる作品作りへの情熱が増しています。

版画をやり続けて 25 年が経ちましたが、さらに表現を向上させて行きたいです。評価をしてもらえることは本当に嬉しいことであると、しみじみ感じております。

春陽会 2024

新会員紹介
new member

第 101 回展 会員推挙



絵画部

荒木 祐一



「KENROKUEN II」
F120 油彩

夢のまた夢

今から40年前の昭和59年5月4日静岡新聞に話題の人として“生へのこだわり絵筆に”と題して大きく掲載された。有力公募団体展に初入選するとはそういうことだった。

連続5回入選が目標になった。実現できた。その頃会員など考えてもいなかった。春陽会会員 それは夢のまた夢だった。

その後3年連続落選、身体的不調。幾度も身を引こうと思った。多様性の時代になっても春陽会は生き続けるだろう。



絵画部

岩瀬 治美



「子どもの情景」F80 油彩

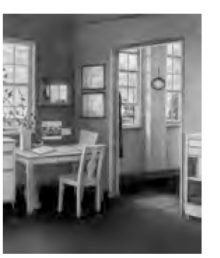
この度会員に推挙され大変光栄です。初出品から30年以上の月日が流れました。

これから皆様と協力して、どれだけできるか分かりませんが自分に課せられた任務を果たせられるよう頑張っていきたいと思いますので、よろしくお願いします。



絵画部

鵜飼 冴子



「空間 III」F130 油彩

自己紹介と抱負

制作活動は個人的なことですが、会の多くの方々と接し又研鑽と発表の場を得られますことを深く感謝致します。

未熟な内面思考の表しですが、今後も表現力の向上に努め、描き考えることをさらに進めてまいります。



絵画部

クニイ マリコ



「From Noon Till Dawn」
F130 アクリル

御 挨 拶

春になると学校中に春陽展のチケットが出回り、いつもの教授達が作家に変わる姿を、格好いいなと憧れていた学生時代でした。

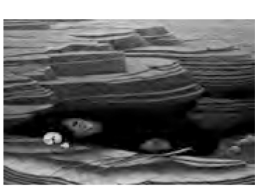
憧れが夢となり目標となり成就した今、やはり私はまだ未熟で、努力を怠ってはならないという気持ちはこれからも変わりません。

今後も挑戦を続け、制作に励み、春陽会のお役に立てますよう精進して参ります。



絵画部

古閑 良隆



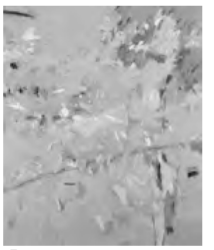
「地底から」F120 油彩

渾沌として何を描いても纏まらない。自分では懸命に描いたつもりでも中途半端な絵にしかなってない。そんな思いで 40 数年が過ぎた。この度、会員推挙と言う報を頂き些か迷いました。果たして良い作品が描けるのか、不安な気持ちでいっぱいです。この先老体に鞭打って、自分に恥じない絵を制作して行きたいと思っています。



絵画部

田口 玲子



「ふるりる 3」F130 油彩

描きたいもの

描きたいものは目の前の自然のなかにある。
心の中に色が飛び込んできて立ち尽くす。
このワクワクを画面の中に閉じ込めたい。
どう描けば良いのかと画面と自然に問いかけながら模索中。
「意味が無くても確かに存在する」そんな絵を描き出したい。



絵画部

山村 泰雄



「石標 I」
M120 アクリル

誘われて富山研究会に所属した後、春陽展への初入選は第 66 回展（1989 年）でした。

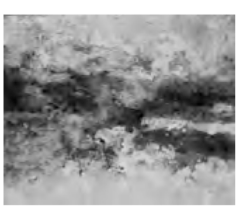
それから 35 年。入選して作品が展示されることは嬉しいことでしたが、あらためて会場で作品を観ると、いつも自分の下手さ加減に情けなくなっていました。

今後、この「情けない」という思いに打ち勝つことができるのでしょうか。今、そのプレッシャーと戦っています。



絵画部

藁科 美穂



「無言の音－声－」
150×182 水干絵具

絵は己の写し鏡。

見れば見る程自分を映し出している。

正直、自分自身をさらけ出しているようで恥ずかしくなってくる。でも、これが現実だと受け止めずっと絵を前にして会話を繰り返す。

現実を受け止めるまでに時間がかかったのか？己自身との対話なのだろうけど、それがとても心地良い。

次はどんな自分を写すのか、楽しみながら描いていきたい。



版画部

田中 洋子



「Poem indigo 33」
64×60 木版

私が木版画を始めて長い年月が経ちました。

これ迄続けてこられたのは、毎年春陽会に出品することを目標に制作してきたからです。

今回、会員になって初期の私の作品を振り返り、ちょっと感心したり、とても新鮮な印象を得たりと、新作に向かう気持ちが沸き上がってきました。

これからも、会員の方々のご批評をお聞きして頑張ろうと思っています。



版画部

則 千代子



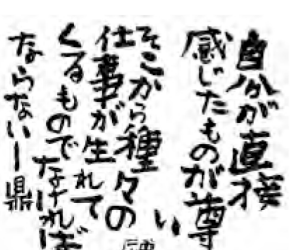
「"仮面族のパフォーマー"」
56×45 銅版

版画制作の場

1950 年生まれ。美術好き美術オンチ。“地道にコツコツ”制作に取り組みたい。

私の通う版画工房では、作家たちの制作中の作品や制作過程を垣間見ることができる。作家の考えや技法の多様化は、版画のおもしろさや版表現の可能性の幅を広げている。

工房での作業は、学びの場である。



上田市神川小学校 校訓
「山本鼎のことば」
中川一政 氏 揮毫



101st exhibition report

巡回展　名古屋展





第 101 回春陽展 名古屋展

愛知県美術館ギャラリー
（愛知県芸術文化センター 8 階）

2024 年 5 月 14 日～ 19 日

共催：中日新聞社 東海テレビ放送 東海ラジオ放送

春陽会中部支部事務所　長谷川光一

第 101 回春陽展名古屋展は 2024 年 5 月 14 日～ 5 月 19 日にかけて愛知県美術館ギャラリーにて開催されました。

全国の会員作品、受賞作品及び中部地区在住の会員･会友･一般出品者 119 名を含む計 304 点の作品を展示。美術館 8 階全フロアを借り切っての展覧会はこの地域でも最大級の規模を誇り、見応えのある内容となりました。陳列にあたっては、作品の傾向別に部屋割りを工夫し、最後まで飽きの来ない展示に心がけました。

会期中の行事としては、5 月 14 日に鈴木善晴氏・船戸郁子氏によるアートツアーを開催し、出品者、鑑賞者を対象に作品の変遷等について意見交換も含めながら行いました。5 月 18 日の会場批評会では中部会員をはじめ、絵画部は小池悟氏・久保敬子氏・金澤千鶴氏・入手朝子氏、版画部では高浦とみ子氏・鈴木雅弘氏・石原テツロウ氏を講師にお招きし、貴重なアドバイスをいただきました。

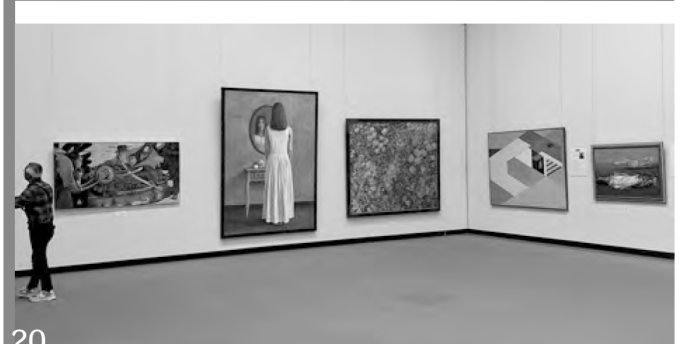
また、小林裕児氏を講師に迎えての画談会を東京第一ホテル錦にて開催し、100 名を超える聴衆が聴き入りました。引き続き行われた懇親会では、共催各社も来賓にお迎えし、受賞者・初入選者の紹介など、和やかかつ盛大に開催されました。

長く続いたコロナ禍も明け、海外の観覧者も多数見受けられるなど、本格的に活気を取り戻した会場は 5 千名を超える来場者を数え、6 日間の会期を終えました。

名古屋展開催にご協力ご来場をいただいた皆様に、心より感謝申し上げます。











特別企画：画談会

日時：2024 年 5 月 18 日（土）
会場：東京第一ホテル錦



私の創作作法

絵画部会員　小林裕児 氏

2024 年 5 月 18 日、恒例となった画談会が、東京第一ホテル錦で開催されました。

今回は講師に小林裕児氏を迎え「私の創作作法」と題し、ご自身の画集に沿った作品の変遷と制作過程について、数々のエピソードを交えながら楽しくお話いただきました。

はじめに６年前に亡くなられた物故会員の小宮英夫さんとの思い出から始まり、ベラスケスに惹かれ家族を描いた初期の作品、時間がかかる油絵具になじめずテンペラとの出会いで自分に合った方法が構築できたことについて語られ、下地やカビ・虫食い対策などの苦労話も紹介していただきました。

作品に登場するモチーフについて、「僕は山羊が好きで、すごくなついて 15 年ぐらい飼っていたんです」「トライアルバイクという曲芸的に乗るバイクを買って、やってみたのですが、バイクだけ先に行っちゃう」などのエピソードに触れ、実際に身の回りにあるモチーフを描くスタイルならではの実験的で体当たりな一面も、ユーモアを交えてお話しいただきました。

1989 年から作風を大きく変え、ドローイングなどの新しい手法を取り入れ、「技術的にもどんどん高くなってきて、これ以上先に行けないなっていう感覚が出てくると、やっぱり嫌なんですね」。教えていた子供の絵を模写したり、丸木舟を作ってその中に立体を作るなど、新たな要素を作品に取り入れていきます。その後 2000 年代に入ると、再び平面的な表現に回帰し、地形や空気の表現に関心を持つようになったことを述べられました。

最後に、ほぼ毎日描いているスケッチブックからのイメージの記録と発見、思考の流れについてのお話や新しい絵の具の開発についての紹介など、盛りだくさんの内容でした。

画談会の後の懇親会では画集へのサインに応じていただくなど、和やかな雰囲気の中での充実した画談会となりました。

文　中部支部事務所　長谷川光一









101st exhibition report
巡回展　関西展





第 101 回春陽展 関西展

宝塚市立文化芸術センター

2024 年 6 月 13 日～ 18 日

後援：大阪市・大阪市教育委員会

春陽会関西支部事務所　金澤千鶴

第101回春陽展関西展は、令和6年6月13日～18日、宝塚市立文化芸術センターで開催されました。今年は梅雨入りが遅れ穏やかな天候でのスタートとなりました。大阪市立美術館改修工事の為、宝塚へ会場を移して3回目の展覧会です。

会場が狭い為、117点（絵画72点、版画45点）の展示です。受賞者は、春陽会賞1名（絵画）奨励賞3名（絵画1　版画2）賞候補9名（絵画会友賞候補2　版画奨励賞候補7）SOMPO美術館賞1名（絵画）でした。

会場研究会では絵画部　小池悟理事長、成實久仁子氏、中部支部事務所　長谷川光一氏、版画部大津悟司氏が講師としてお越しくださり、厳しくも暖かいご指導を頂きまして充実した講評会となりました。

今年の関西支部は、不出品、ご逝去、退会と会員が減る中、巡回展開催への不安もよぎりましたが、開催のサイクルが回り始めますと、少ない人数ながらも皆さんのエネルギーが結集して無事開催にこぎつけることができました。充実した展示内容に満足して会場を後にする来場者の声を多々聞いております。諸先輩方が一回一回積み上げてこられた結果だと改めて頭の下がる思いです。

懇親会は宝塚ワシントンホテルで、来賓のホルベイン工業吉村様、川端商会茂越様、講師の皆様を交えて和やかに進行しました。

来年2025年の展覧会会場は大阪市立美術館へ戻ります。色々な方に興味を持っていただける魅力ある展覧会として、今後も繋いでゆけたらと願わずにはおれません。

改めまして皆様のご協力に心より感謝申し上げます。

















新たな版画部秋季展へ

秋季展主任　全田紗和子

令和 6 年 9 月、神保町の文房堂ギャラリーにおいて版画部秋季展を開催致しました。会場の様子は動画にて、インターネットでも閲覧出来るよう致しました。

今回は、会員 52 名・会友 5 名・一般 1 名の参加です。第 101 回展版画部審査において、全会員の総意のもと賞候補上位 6 名による会友・一般の作家達の作品を見て頂きたいと企画し、その試みは会員やお客様からも高評価を頂きました。そして、会員の先生方の作品は益々熟練の重みが増し、一点一点が丁寧に制作され、個々の世界観がより深く研ぎ澄まされて来ているように思えます。

お互いに学び合い、更なる活躍をして頂きたいとこれからも切に願っております。

第 41 回 中部春陽 2024　年 展

「 年 展 」を終えて

中部春陽年展事務所　杉藤哲正

名古屋の秋が深まり紅葉シーズンになったころ、「2024 年展」が終了いたしました。中部における絵画・版画の公募団体として、年展は最大規模を維持しております。

会期中は「対話研究会」、「対話空間」、「画談会」といった、出品者相互がより良い関係を築けるような事業を企画しました。それぞれの芸術観を深め合うなかで、また画談会では中部春陽展から 67 年、年展となり 41 年が経ち、歴史を支えた諸先輩に敬意をはらいつつ、今後に向けての会への意識が高まったのではないかと思います。

展示作品は約 150 点、その中で初出品者が 11 名あり、例年に比べて新人が多かったことに、次回への希望を強く感じました。名古屋を拠点する展覧会として、展示内容共に充分なものであったと思われます。





SHUNYO NEW ARTISTS WAVE 2024

東京都美術館 ロビー階 第 1 展示室

2024 年 12 月 4 日 (水)～11 日 (水)





SHUNYO NEW ARTISTS WAVE 担当理事　高松博仁

今年度の SNAW は、東京都美術館ロビー階第 1 展示室において 12 月 4 日（水）～11 日（水）に開催された。隔年開催である春陽会全国研究会選抜展（絵画部・版画部）も同時開催であり第 101 回春陽展受賞作家展（絵画部・版画部）と春陽会東京研究会展（絵画部）と 3 部構成の展覧会となった。

東京都美術館との折衝、事務所との連携、各部の主任との打ち合わせなど多岐にわたる綿密な作業と日程調整の賜物と自負している。とりわけ担当理事の篠田氏、中台氏の卓越したお力に負うところが大きい。

会期中、1842 名の来場者となった。担当者の一人として望外の喜びに溜飲を下げる結果になった。今回の展示室がロビー階の第 1 展示室であったことが大きく関わりがあったと思われる。東京都美術館に訪れた来館者にしっかりと展覧会をアピールし、そして無料で気軽に覗いてみようかと思う美術愛好家を引き寄せた結果であろうと思われる。受付業務に携わった方々から、外国人、それから修学旅行生の来場が目立ったとの報告があった。中には、画集を買いたい、入会したいがどのようにすればいいのかとの問い合わせがあったそうだ。

今回、当番をお願いして快くお引き受けいただいた方々に感謝申し上げたい。本来、出品者の全ての方々に割り振って当番をお願いするところであるが、出品者が全国にお住まいであることや不慣れのうえ美術館のセキュリテイに関わることを担っていただくには忍びなく、また今年も東京近郊の会員の皆様にその任をお願いすることになり、恐縮の至りである。今後の課題である。



最後に出品された作家の方々、ご尽力いただいた関係者の皆様に感謝を申し上げます。





第 1 部：第 101 回春陽展 受賞作家展





第 2 部：春陽会全国研究会選抜展





第 3 部：春陽会東京研究会展（絵画部）



全国研究会からの声 & Message

各研究会では、様々な活動が意欲的に行われています。

■年間を通じた作品批評会　■研修会ワークショップ
■研究会展・会場批評会　■講演会
■全国研究会による選抜展



カット／三浦やほ子



絵画本部研究会

研究会本部に携わり、2 年にわたり本部主任を務めさせていただきました。この度退任にあたり、力至らなかったという思いです。

各地区研究会の努力は大変なものですが、少子高齢化は顕著で、春陽会のみならず日本全体の問題なのだと痛感いたします。これからの研究会、しいては春陽会自体の在り方が問われる時期になっている現実は、今後の研究会の大きな課題となっていくのではないかと思っています。　〔主任　畠山昌子〕

版画本部研究会

本年度は絵画部とともに全国研究会選抜展を開催し、本展同様会場批評会は充実したものとなりました。どの研究会も研究生獲得に努めています。瀬戸内では研究生増と聞き嬉しく思いました。

版画は技術習得が必須です。各研究会より要望をきき、版種を考え講師派遣をしています。年間を通し様々な研究会活動は春陽展の向上につながり、重要性はいうまでもありません。各研究会と連携し、より一層の活性化を図るべく努めて参ります。

〔主任　ウチダ ヨシエ〕



東京研究会版画部

「目で見て、耳で聞いて、手を動かして」



8 月、仲野壽志氏によるレクチャーを開催しました。

自作木版画についてのお話に加え、清宮質文へのオマージュ作品制作である水性木版画凹版摺りを参加者全員が体験 (摺った作品は持ち帰れる！) という素晴らしい機会に、研究生が積極的に摺る姿が印象的でした。また、数年ぶりに作品批評のみの研究会開催と 2024 年は有意義な年となりました。　〔主任　内山良子〕

北海道研究会絵画部　「道作家展を終えて」

2024 年 11 月 24 日、会員岩井千佳氏を講師としてお迎えし、第 34 回道作家展を開催しました。

会員の減少に伴い会場は 1 室減、出品者 8 名、出品数 13 点と規模は縮小されましたが、反面、時間的余裕で講師との講話も多く取れたという利点もありました。

岩井氏の的確な助言は、立ち会った私達の制作への意欲に繋がると思いました。

この時期の札幌は真冬に突入する頃でもあり遠く寒い地に勇気を持って来道いただいた岩井氏に心から感謝申し上げると共に、札幌、遠く函館、新得町からいつも参加してくれる仲間たちに、より良い研究会で有りたいと念じています。　〔主任　佐藤愛子〕





東京研究会

今年も無事に「SNAW 2024 東京研究会展」を開催することができました。

初回はコロナ禍で不安な中でのスタートでしたが、5 回目となる今年は SNAW 全体で 1800 人以上もの方にご来場いただくことができました。

会場研究会では、普段なかなかお会いできない遠方の会員からも講評を頂くことができ、東京研究会とって実りある展示となりました。〔主任　中台ゆう子〕



カット／佐藤淳子



北海道研究会版画部

北海道研究会版画部は成立 10 周年を迎え、札幌セントラルギャラリーで 3 月 18 日から 24 日まで作品展を開きました。現在 8 名で、銅版・木版・リトグラフ・孔版をしています。

北海道は広いので極力各地で展示をすることを目標として開いてきました。今回は入場者も多く、また春陽会 100 年記念誌を見る人も多く、充実した展覧会でした。　〔主任　大井戸 百合子〕

神奈川研究会　「第 71 回研究会展を終えて」

昨年 10 月 16 日～ 20 日、横浜市民ギャラリーの 1,2,3 階の広い会場で研究会展を開催。

研究会員の減少で壁面を埋める事が出来るのか案じられました。会員減少はいたしかたない事ならば各人に頑張ってもらうしかなく、一人 3 点出品の声掛けにも反応があり、全員の熱意を感じる作品を展示。

沓間宏先生の講評会に各人心に契するものがあったと信じられる研究会展でした。

〔主任　桜井敬子〕



春陽会 2024



中部研究会

中部研究会では、定例批評会やその他活動に、いろいろなご事情で以前より作品を持ち込めない方が増えてまいりました。が、意欲的に研究会活動への参加希望の方も多くおり、毎回の作品の持ち込みが出来なくても、色々な方法で作品について批評や制作について話が出来る場・コミュニケーションを取れる場を大切に活動しております。　〔主任　長田文実香〕

中部研究会版画部　「6 年ぶりの研究会展開催」

前回は 2018 年に今回と同じ大黒屋画廊で開催しました。6 年前の出品者のうち、亡くなられた鈴木孝太朗氏やご高齢のため退会された方に代わり、新しく 6 名が加わり 16 名が参加しました。

旧メンバーの個性的で存在感のある表現と、新メンバーはリトグラフ、シルクスクリーン、木版の版種で新鮮な作風が感じられました。

最終日には批評会を行い、充実した展示でこれからの期待を感じることができました。

〔主任　杉藤万里子〕







栃木研究会

今年の春陽会栃木研究会展は、9 月 21 日（土）～24 日（火）栃木県総合文化センター第 4 ギャラリー ABC で開催された。出品者数 20 名、出品点数は 36 点であった。

派遣講師に山本睦氏をお迎えしご批評いただき、出品者の大いな糧として展覧会の成功を彩っていただいた。感謝申し上げたい。その後の懇親会・二次会にもご同行いただいた。

来年は 70 周年になる。小品展を併設したいと考えている。

〔主任　高松博仁〕

群馬研究会

R7.5.12 前橋市でシルバーポイントのワークショップを開催いたしました。講師は小林裕児先生です。

当日は、μ-GROUND・手作り銀筆・水彩紙・ドライヤーを準備して小品を描きました。また、数種類の硬貨でも描画を試みました。

一般の方の参加可能で人気があります！シルバーポイントの魅力に引き込まれた 1 日でした！　〔主任　坂井和子〕



カット／木村梨枝子



全国研究会からの声 & Message

中信研究会

中信研究会は 2024 年 2 月 10 日（土）に、松本市美術館アトリエにて研究会を開催いたしました。

参加人数は 4 名と少人数ではありましたが、会員会友・一般という垣根を超えて、オープンにお互いの作品に対しての意見を交わすことができたのはとても良かったと思います。密度と活気のある研究会が開催できたと感じています。

〔主任　畠山昌子〕

南信研究会

12 月 1 日（日）、東直樹先生を講師にお迎えして作品研究会を行いました。参加者 12 名。

「モチーフに向き合う気持ち…、観念的ではなく自由に…、自分が楽しくなければ…」など、各々の作品について丁寧なご指導をいただきました。

先生には 20 年程前にもお出でいただいており、当時の写真を見ると、先生はじめ我々会員も若く活気にあふれていました。

久し振りの懇親会では昔のこと、これからのことで盛り上がり楽しいひと時を過ごすことができました。

〔主任　三島かくえ〕







カット／鈴木善晴

富山研究会　「研修会」

今年度は長野県立美術館で開催された「春陽会誕生 100 年 それぞれの闘い 岸田劉生、中川一政から岡鹿之助へ」の鑑賞会を行いました。

それぞれの個性が際立つ「各人主義」と、共通する制作に対する厳しさを感じながら、帰りには美味しいお蕎麦を頂き、有意義な研修会となりました。

〔主任　桑嶌美代子〕



東北信研究会　「研修・貸切りバス旅行」

東北信研究会は、今年 10 月、久し振りに会員の研修旅行を実施。信州の鎌倉と言われる塩田平で、古刹前山寺・塩野神社などを貸切りバスで巡りました。

また、近隣にある無言館では、戦没画学生の作品を拝見し感無量。当たり前に絵を描ける環境に感謝です。そして、ギャラリー輝では「色の詩人 故池田輝」先生を肌で感じ、一同元気を頂きました。

昼食は秋の味覚松茸御飯・胡桃の御萩を食し、良き一日でした。

〔研修係　島田優子〕



春陽会 2024



関西研究会版画部

関西春陽会版画 2024 は 9 月 25 日から 29 日まで、神戸市の原田の森ギャラリー 1 階で開催されました。

今年は出品者も増え、会友・研究生を中心に計 14 名、作品総数 35 点を展示しました。また、新しい研究生も参加し充実した展示となりました。

会場研究会では大久保澄子氏を講師に迎え、それぞれに丁寧なアドバイスを頂き、今後の指針となりました。

その後の懇親会では、和気あいあいの雰囲気の中、楽しく交流を図れました。　〔主任　山口剛史〕

関西研究会

「関西春陽会絵画部展 2024」は 9 月 18 日（水）から 9 月 22 日（日）まで神戸市の原田の森ギャラリー本館 1 階で開催しました。

会員、会友、研究生 27 名参加、作品数 42 点を展示しました。

9 月 16 日の搬入展示後、昨年実施した「作品を語る会」を会友主導で今年も開催し、お互いの作品について意見交換をし、それぞれの作品と人となりを理解する場となりました。また、21 日の会場研究会では岸鹿津代氏を迎え、丁寧で的確な講評を頂き、そのあとの懇親会では楽しい会話で和やかな会となりました。入場者数 497 名。

関西研究会賞―中山悦男

関西研究会奨励賞―村上敬雄、廣岡益太郎

後援－兵庫県、神戸新聞社

協賛－ホルベイン画材、ターナー色彩、ギャラリーシラキ

〔主任 高田三穂子〕



6 月 宝塚の夜





山梨研究会

山梨研究会は約 15 名と少人数ですが、皆個性派揃いで意欲盛んです。

第 101 回展では出品者 10 名全員が入選し、その中からは新たな春陽会会員も誕生して、にわかに活気づいています。恒例の研究会展は山梨県立美術館一般展示室で行い、今年 41 回を数えました。

作品講評会やデッサン会、実技会などの研究会活動を本制作に結びつけたいと、日々奮闘しています。

〔主任　沓間　宏〕

静岡研究会　第 26 回静岡研究会展 (10/28～11/3)

今年の研究会展の会期中は雨の日が多く、入場者 17 人の日もありましたが会期中合計 390 人の多くの方にご覧いただけました。

会場作品批評会は人気の鈴木善晴先生。丁寧なご批評と制作の秘密に迫るお話、見せていただいた貴重な資料に一同大感激でした。実はこの日は大雨で行きも帰りも新幹線が止まってしまい、会場研究会開催も危ぶまれた状況でしたがなんとか実施でき盛り上がりましたこと、ご報告します。　〔主任　瀧 貴美枝〕





山陰研究会

昨年、10年ぶりに研究会で小品展を開いた。みんな、歳を重ねたが、なんだか楽しい勉強会となった。

感動や思いを色と形と画肌のハーモニーに託して一歩ずつキャンバスという山を登っていく。その道のりで色んな景色に出会うのが楽しい。

山頂にたどり着かないことも多いけれど和気あいあい登山、まだまだ楽しみましょう。

〔主任　三島耕二〕

九州研究会

2024年11月に大分と熊本2拠点で第18回春陽会九州研究会展を開催致しました。新たに20〜30代の4名が加入し、展示会場はいっそう賑やかなものとなりました。

会場講評会には三浦明範先生を本部よりお迎えし、方向性へのヒントや視野が広がるおもしろい概念のお話ばかりで、九州研究会の面々も興味深く聞き入っていたのが印象に残っています。　〔主任　川野美華〕





瀬戸内研究会版画部

瀬戸内研究会（版画部）は新しい仲間を迎え瀬戸内をはさんで6名で活動しています。

新体制になり初めてギラリーキャメルK(2024年11月8日〜13日)で研究会展を行いました。

11月9日には、講師に島けいこ氏を迎え有意義な研究会が行なわれました。前回の研究会展以降、集まっての研究会をしていませんでしたが、改めて必要性を認識しました。　〔主任　塩田　恵〕

瀬戸内研究会絵画部

瀬戸内研究会はここ数年絵画と版画とそれぞれの活動となっています。

絵画の方は研究生お2人が頑張っておりますが、2024年度は研究会の開催は見送りました。

「SNAW 2024 第2部 春陽会全国研究会選抜展」には藤本泰男氏が出品され、これまで一貫して描かれてきたモチーフからの新たな展開も見られました。お2人には春陽会の枠を超えてご活躍いただきたいと思います。

〔主任　畠山昌子〕



カット／
鈴木善晴



春陽会資料室のご案内

事務所の下の階に資料室ができました。100年前の会務資料、木村荘八のスクラップブックなどが整理され、資料の全容が見えてきました。

このスペースで、膨大な資料のデジタル化作業が支障なくできるようになりました。

春陽会は将来データのみ保持し、実物は研究機関などに保管されるのが望ましいのですが、そのためにもデータ化を進め、周知していこうと思います。

ぜひ一度資料室に足をお運びください。　〔アーカイブ担当〕

epilogue

新旧事務所より

「千両みかん」と云う落語が好きだ。
真夏にミカンに恋焦がれた若旦那の為に番頭が奔走し、千両の値のついたミカンと自分の人生と比べ三つ房のミカンをもって出奔すという落（おち）の話。価値の転換が心をくすぐる。

新理事長　立堀秀明（タツボリヒデアキ）

＊

この度は書記を務めさせて頂くことになり、責務をひしひしと感じております。想像以上にタイトなスケジュールですが、前事務局や事務所の方々に教わりながら一つ一つ仕事を覚えていくよう努力して参ります。
改めて春陽会を 100 年以上築いてこられた方々に敬意を表したいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

新版画部書記　三浦やほ子



春陽会の事務業務に就いてから２年が経ちまして、多少慣れてきましたが、未だに関係者様方に対して適切な対応が出来ているのかが非常に心配です。
至らぬ点がありますが、どうぞ宜しくお願い致します。

事務職員　森　千尋

＊

まずは理事長はじめ事務所の皆様本当にありがとうございました。この 2 年間、書記を務めることができましたのはひとえに皆様のおかげです。素晴らしいチームに恵まれて楽しい 2 年間でした。
新事務所の皆様、良いチームを作ってください。

前絵画部書記　成實久仁子

＊

遠方から通ったあっという間の 2 年間でした。
最初が第 100 回記念の節目の年ということで、目が回ることの連続。しかし、良い思い出になりました。
助けていただいた皆さんに、感謝！感謝！

前版画部書記　鈴木雅弘

＊

にっこり
長きにわたり春陽会の会務を担当させていただきありがとうございました。いろいろな出来事が走馬燈のように喜怒哀楽を伴い思い出されます。
特に大切なものをいただいたことは、会務に携わらなかったら多くの春陽人の方々と決して出会うことがなかったことと改めて思い、本当に感謝申し上げます。

前会計係　田中俊行

昨秋より 2 年間書記を務めることになりました。思いの外仕事量も多く、制作時間が大幅に減少している現状です。
少しずつですが、会の運営・展覧会の開催等、諸先輩方のお蔭でこのようにして成り立ってきたのだと解ってきました。
会員になってから、微力ではありますが、お世話になったご恩返しをしたいと常々思っていましたので、よい機会と考え、可能な範囲で努めてさせて頂きたいと想います。

新絵画部書記　狩野三也子

＊

名古屋より引越したばかりで会計のお話があり、軽く引き受けたのですが、始まってみるとその重責にびっくり。
せめて皆様の足を引っ張ることなくお手伝いが出来たらと思うこの頃です。よろしくお願いいたします。

新会計係　田中由子

＊

今年から事務所に互助会の手伝いのため参加しています。パソコンもできず、気もまわらない私ですが、ある程度の力仕事ぐらいならと思い、周りの先輩方の邪魔にならぬよう頑張りたいと思っています。

新互助会　福冨耿介

＊

公募団体活動は門外漢の私ですが、99 回展から今展 102 回で 4 回目の春陽展になります。皆様に助けていただきながら、事務会計担当としてできることを一つひとつ積み重ね、少しでも皆様のお役に立てるよう頑張りたいと思います。

事務職員　内山房子


久仁子 35 歳 19○○ 夏


雅弘 20 歳 ミラーボール


俊行 in Aix-en-Provence


カット
／立堀秀明


敬子 25 歳　山ガール


悟 28 歳 65Kg

会議は ZOOM でね・・って何？？？あわてて友達にライン。アタフタする間に第 100 回展突入。あっという間の二年間。
互助会の仕事は慶弔からお弁当・おやつの手配、その他の雑務と、“何でもやる係”でした。暖かく見守ってくださった事務所の皆様に心より感謝です。
ありがとうございました。

前互助会　久保敬子

＊

この 2 年間、充実した日々で、楽しい想い出ばかりです。貴重な体験となりました。大変お世話になりました。
何ごとも、今は昔･･･。眩しく輝やいていた奇跡の写真と共に、心より感謝申し上げます。

前理事長　小池　悟

第102回

2025

春陽展

絵画 / 版画

SHUNYO ART EXHIBITION 2025

Paintings & Prints

2025.4.16㈬－4.28㈪

国立新美術館 展示室 2A・2B・2C・2D・3B

〒106-8558 東京都港区六本木7-22-2

10:00～18:00 4月22日㈫休館日　最終日は15:00まで（入場は30分前まで）

主催：一般社団法人春陽会　後援：社会福祉法人 NHK 厚生文化事業団

名古屋展――愛知県美術館ギャラリー　5月13日㈫～18日㈰

大 阪 展――大阪市立美術館天王寺ギャラリー　6月 3 日㈫～ 8 日㈰

102号(No.106)

春 陽 帖

表紙／立堀秀明　「影に透け」
15×10cm 木版

カット／佐藤淳子　木村梨枝子
立堀秀明　鈴木善晴
三浦やほ子

カットをお寄せいただいた皆様、ありがとうございました。

2025 年 4 月 16 日発行
編集　小池 悟
発行所　一般社団法人 春 陽 会
印刷・製本　アベイズム株式会社

春陽会

2025